

神経線維腫症患者における脊椎手術の実態調査

研究分担者 筑田博隆 群馬大学医学部整形外科教授

研究要旨

DPCデータベースを用いて神経線維腫症患者における脊椎手術の実態調査を行った。神経線維腫症患者が受ける脊椎手術の実態調査ができた。また、神経線維腫症患者は脊髄腫瘍切除術後の90日以内の再入院のリスク因子であった。

A. 研究目的

近年、脊髄腫瘍に対する手術治療の術後成績不良因子として神経線維腫症が報告されている。本研究では、DPCデータベースを用いて神経線維腫症患者が他の患者と比較して脊髄腫瘍手術後のadverse event発生のリスクが高いか調査する。

B. 研究方法

①、DPCデータベースを用いて、神経線維腫症患者が受けた脊椎手術の情報を抽出し、患者背景や合併症の発生を調査する。
②、DPCデータベースから脊髄腫瘍切除術を受けた患者を対象とした。調査項目は手術時年齢、性別、BMI、喫煙歴、輸血の有無、糖尿病の有無、透析の有無、麻酔時間、神経線維腫症の有無とした。アウトカムは入院中の術後合併症（脳卒中、心血管イベント、肺塞栓、呼吸器合併症、腎不全、敗血症、手術を要した創部感染症）と90日以内の再入院とした。多変量解析には一般化推定方程式を用いて病院や患者の背景を調整し、各アウトカム発生に関係する要因を検討した。

（倫理面への配慮）

本研究で使用したDPCデータベースからは個人を特定する情報は抽出されない。

C. 研究結果

①、計45ヶ月のデータ抽出を行ったところ、神経線維腫症患者1,113入院のうち、側彎症手術を受けた患者が25名、脊髄腫瘍切除術を受けた患者が105名いた。2つの手術では手術時年齢・合併症の内容が異なる傾向があることがわかった。

②、計56ヶ月のデータ抽出を行い、5,482名の脊髄腫瘍切除術を受けた患者を調査したところ、105名(1.9%)が神経線維腫症患者であった。全患者のなかで、入院中の主な合併症は154名(2.8%)に生じ、90日以内に再入院をした患者は243名(4.4%)いた。神経線維腫症患者は、他の患者と比

較して、90日以内の再入院リスクが有意に高かった(odds ratio, 2.05; 95% confidence interval, 1.03-4.06; p=0.04)。

D. 考察

神経線維腫症患者の脊椎手術の実態調査を行い、患者背景や合併症の内容が側彎症手術と脊髄腫瘍切除術とでは異なることがわかった。脊髄腫瘍切除術の手術成績は、神経線維腫症患者は他の患者と比較して悪かった。

E. 結論

DPCデータベースを用いた本研究において、神経線維腫症患者が受ける脊椎手術の実態調査ができた。また、神経線維腫症患者は脊髄腫瘍切除術後の90日以内の再入院のリスク因子であった。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表
投稿中

2. 学会発表
脊髄腫瘍切除後の合併症と90日以内の再入院 — 神経線維腫症はリスク因子か?—
第46回日本脊椎脊髄病学会学術集会
Journal of Spine Research, 8(3), 293, 2017

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録なし
3. その他 なし